

# 病気の子どもを励ます「ギブ・キッズ・ザ・ドリーム」の活動から

久保田 展史

(博士前期課程 2007年度生)

## 1. はじめに

2003年より京都府立医科大学附属病院（以下、府立医大病院）ならびに京都府立医科大学附属小児疾患研究施設（以下、京都府こども病院）において、病児を励ます活動「ギブ・キッズ・ザ・ドリーム」を行ってきた。この活動は、筆者が勤務する京都YMCAにおいて青年ボランティア達とともに取り組んでいるものである。入院をしている子ども達に、少しでも心安らげる楽しい時、心待ちに出来る時間をプレゼントしてあげたいという思いを出発点としたものだ。現在、3つの小児病棟を月に1回定期的に訪れ、歌や紙芝居、人形劇やクラフトなどのプログラムを行っている。本報告では、この5年間の取り組みの経緯と特徴的なプログラムを取り上げ、その実践内容と成果、今後の課題について報告する。

## 2. 子ども達の入院生活の現状

府立医大病院と京都府こども病院にはあわせて4つの小児病棟がある。そのうちNICU（小児集中治療室）を除いた3つの病棟にはそれぞれ約27床のベッドがあり、最大約80名の子どもが入院している。病棟によって内科、外科と疾患が分かれ、症状によっては長期の入院をせざるを得ない子ども達も多い。

入院中の子ども達は、医療従事者や見舞付添の家族との接触以外には、外部の人との接触の機会は皆無といえる。さらに小児病棟では、外

部からの感染を予防するため学齢期の子ども病棟への入室は禁止されており、兄弟姉妹さえも病棟に入ることができない。また病院内は、一年中一定の温度に保たれているため、季節の変化を感じる機会が乏しい。本来、子どもは人や街や自然など、外界からのさまざまな刺激を受けながら成長していくのであるが、入院中の子ども達は変化や刺激の少ない単調な毎日を過ごさざるを得ない。また病状によっては治癒の目処、治療の進行などの先行きが見えず不安な日々を送っている子ども達もいる。

筆者は青少年の健全な育成を目的とするYMCAの職員として、このような環境におかれている病児を励ますプログラムを行いたいと長年考えていた。しかしこうした活動への社会的な理解は筆者らが活動を開始する以前は十分なものではなかった。現在活動を行っている府立医大病院と京都府こども病院でも2002年以前は小児病棟でのボランティアを積極的に受け入れてこなかった。小児医療におけるボランティア活動を妨げる大きな要因としては、松尾・原<sup>1</sup>が指摘するように「事故の危険性が高く、急変しやすい子どもの特徴が、ボランティア活動を困難にする要素もある」ということが挙げられよう。

## 3. ギブ・キッズ・ザ・ドリームの月々の活動

2002年12月、ノルウェー政府公認のサンタクロースが府立医大病院の小児病棟と京都府こども病院を訪問する機会があった。このイベント

<sup>1</sup> 松尾ひとみ、原智子「小児医療におけるボランティアの活動状況：文献検討を通じて」（『福岡県立大学看護学紀要』第2巻1号、2004年、6ページ）

の進行と通訳、楽しいゲームを京都YMCAの青年ボランティア達と筆者が行ったことをきっかけに、2003年3月から約2カ月に1回の病棟の訪問プログラム「ギブ・キッズ・ザ・ドリーム」の取り組みが始まったのである。当初不定期であった活動は2004年4月から月1回の定例で行うようになったのである。

訪問は子ども達の体力等に配慮して各病棟40分とし、歌や人形劇、クラフトなどを行い、出来るだけ季節感を感じてもらえるようにテーマを設定している。3つの小児病棟のプレイルームを順に回り、同じプログラムを3回行うのであるが、その時に参加できる子どもの年齢がまちまちであり、幼児や就園前の子どもと乳児達ばかりの時や、高学年や中学生なども加わる時もある。そのために小学校低学年を中心にプログラムを準備するが、高学年向け、保護者を交えた乳児・幼児向けのプログラムもあらかじめ考えて臨んでいる。しかし、それでも当日体調がよく各病室からプレイルームに出てきて一緒に遊べる子ども達の数は、入院している子どもの1/5ぐらいの人数である。

筆者をはじめとするYMCA側と病院関係者<sup>2</sup>は2か月に1回打ち合わせ会を行っている。終了したプログラムの内容について不適切な点がなかったか、改善点はないかを評価し、次回・次々回の内容の確認を行うのである。

これらの評価の中で、子ども達が毎月の訪問を楽しみにしていること、しかし体調が悪くて楽しみにしていてもその日に参加できない子もいることなどを聞いて、病室から出てこれない子ども達のためにお土産としてクラフトを余分に用意したり、バースデイカードを用意したりするようになった。またこの打ち合わせ会での評価をうけて、歌と音楽を必ず入れ、次に人形劇や紙芝居を行って、メインプログラムには子ども達が自ら参加できるゲームやクラフトなどのプログラムを行って、最後に音楽で終わるという一連の流れが定着してきた。そして観るだけに終わらず、主体的に参加できるプログラムにすること、プログラムの余韻を病室で楽しめるようなお土産を自ら作るなどを工夫した。



毎月の訪問活動



打ち合わせ会

#### 4. 子どもコンサートの実施

前述の打ち合わせ会の中で、子どもたち向けのコンサートができないだろうかという意見があり、楽しい歌の時間「子どもコンサート」を2003年11月に実施した。2005年度以降はエレクトーン奏者を招いて「アニメソングコンサート」

として企画実施している。第3回からは子ども達のリクエスト曲を中心とした参加型コンサートとし、楽器演奏で演奏に加わったり、手話を交えたりして進めている。2006年より初夏にも実施することとし、これ以降は初夏と秋の年2回の開催が続いている。

<sup>2</sup> 病棟の看護師長3名、病棟の保母3名、病院看護部の師長1名である。



子どもコンサート

## 5. 夏祭りの開催

入院をしている子ども達にとってはお祭りに行くことは難しい。京都三大祭のひとつである祇園祭さえも見たことがない子どももいるということで、ぜひ祇園囃子と宵山の雰囲気味わってもらいたいと2007年7月に夏祭りを実施した。祇園囃子の演奏を南観音山保存会<sup>3</sup>の囃子方（はやしかた）にお願いし、「祇園囃子の演奏と夜店」という内容の夏祭りを行った。

当日、子ども達はこの日を本当に心待ちにしていたようで、自宅から浴衣を準備して下駄をはいて現れた。祇園囃子がロビーに響き渡り夜店がオープン。ヨーヨー釣りや輪投げ、ボーリングやスマートボール。会場には風船アートのおじさんや、怪しい占い師もいたりして大賑わい。50人近い子どもと保護者、看護師や看護学生、医師も混じって本当に宵山のような賑わいとなった。子ども達はみな笑顔で、それを見ている保護者も幸せそうな顔をしている。アツという間の50分で、最後に仕舞の祇園囃子の演奏を楽しんで子ども達は病室への帰途についた。

## 6. 成果と今後の課題

病院訪問を続けて5年となる2008年3月に「5周年を記念した評価会」というワークショップを行った。看護師長は「このプログラムによって子ども達の笑顔が増えるようになり、その笑顔によって保護者がずいぶんと落ち着いてくるようになった。」「5年前にはプログラムの様子を外から看護師が見ているだけで『見物ではない』などとクレームを言う母親がいた。それが今では本当にリラックスして参加してくれていて、だれも文句を言う人はいない。」「以前は病気への不安でストレスがたまり、それをぶつけるように看護側にクレームを言う人が多くいたが、今ではほんとうに少なくなった。」「子ども達が笑顔であると、保護者も安心して落ち着くのでこの活動は貴重である。」など、病院側から見たこの活動の意義を熱く語ってくださった。またこの会では、小児科病棟の看護師長から病室を出られない子ども達の個室に入ってプログラムを行ってももらえないだろうかとの要望があったことから、今後病院側と協力して個室訪問プログラムの実現を目指して行きたいと考えている。

また、夏祭りに協力をいただいた南観音山保

<sup>3</sup>「南観音山」は京都の祇園祭の32基の山鉾巡行のしんがりを務める曳山で、「下り観音山」とも呼ばれる。



祇園囃子の演奏と夜店の夏祭り

存会の方々からは、「最初点滴をしながら現れた子ども達を見てかわいそうで、もうこんな姿は見たくないと思ったが、最後の子ども達の笑顔を見てぜひ来年も来なければならぬと強く思うようになった。」との感想が寄せられ、その後の南観音山保存会囃子方の総意としてぜひ来年も演奏させてほしいと伝えられてきた。こ

れまでもクリスマスのサンタ役や3月のひな祭りのプログラムの琴の演奏など、青年ボランティア以外の方々にも協力をいただいているが、今後この活動に関わってくださる人々のネットワークをさらに拡げていくことが課題であると考えている。